

【2026 ワールドカップ・ミラノ大会 2日目】

大会2日目は、個人・団体ともに総合順位を決定する重要な一日となった。
世界選手権前最後の実戦として、前日の課題を踏まえながら演技の完成度向上を図り演技に臨んだ。

【鈴木菜巴】 個人総合 31 位：100.950

〈クラブ〉

得点：26.800 (DB8.1／DA3.9／A7.45／E7.4／P0.05)

前日の疲労を感じさせることなく 2 日目を迎え、落ち着いた状態で競技に臨んだ。クラブはシーズンを通して完成度が高まり、演技の熟練度も着実に向上しているものの、本番では予期せぬ状況が起こり得ることを想定し、「いつもどおり」を意識してフロアへ向かった。

演技では前日以上に身体難度が明確に実施され、身体の動きにも力強さが感じられる内容となった。一方で、リスクにおける 2 本投げのタイミングや受けの加点など、一部で予定していた D 得点を獲得できなかった場面もあり、得点を伸ばすための課題も明確となった。

本番では、どれだけ準備を重ねても想定外の状況は起こり得る。しかし、その状況を冷静に判断し、その場で最善の選択を行いながら演技を継続する対応力こそが、世界で戦うために求められる力である。今回の演技では、その対応力にも成長が感じられ、世界選手権に向けて大きな収穫となった。

〈リボン〉

得点：25.600 (DB6.4／DA4.2／A7.7／E7.3)

演技では、思い切って表現する部分と慎重に実施する部分のバランスを意識しながら、世界選手権へ向けた最終調整として丁寧に演技をまとめた。

北京大会終了後から、ステップや身体難度の配置・内容を見直し、自身のエネルギーを最大限に表現できる構成を追求してきた。本大会では、その改善が芸術性にも反映され、芸術点 7.700 という評価につながった。

一方で、最後のリスクでは手具が真上に上がってしまい、予定していた内容を十分に実施することができなかった。しかし、各採点項目が独立して厳格に評価される国際基準の中で、演技全体の表現力やエネルギーが評価につながったことは大きな収穫であった。

本大会を通じて、世界で戦うためには技術だけでなく、一つひとつの動きの質やエネルギー

を最後まで維持することの重要性を改めて確認することができた。世界選手権では、今回得られた成果をさらに高め、細部まで完成度を追求した演技を目指していきたい。

【喜田未来乃】 個人総合 25 位：104.800

〈フープ〉

得点：27.900 (DB8.9／DA3.9／A7.6／E7.5)

2 日目最初の種目となったフープでは、技を最後までやり切るという強い意志が感じられ、演技全体を通して高いエネルギーを維持した内容となった。身体の動きや表現にも力強さがあり、今大会の中でも完成度の高い演技を披露することができた。

一方で、DA 中の身体難度 (DB) では静止がやや不十分となった場面があり、本来獲得できる得点を取り切ることができなかった。世界の上位を目指すためには、このような細部の精度をさらに高め、試合本番でもすべての難度を確実に実施し切ることが重要である。

また、種目別決勝は惜しくも同点 9 位となり、わずかな差で決勝進出を逃した。世界のトップレベルでは一つひとつの技術の精度が順位を左右することを改めて実感した一方、決勝進出まであと一歩という位置で戦えたことは、世界との差が着実に縮まっていることを示す成果でもあった。今回得られた課題を確実に改善し、世界選手権ではその一歩を乗り越えられるよう取り組んでいきたい。

〈ボール〉

得点：24.250 (DB6.6／DA3.6／A7.25／E6.8)

前半は落ち着いて演技を進めることができ、身体難度や手具操作も丁寧に実施できていた。しかし、後半の前転シリーズでは投げが前方へ流れたことで落下が発生し、大きな失点につながった。

この場面は日頃から課題として取り組んできた技であったが、予定どおりではない投げとなったことで判断が一瞬遅れ、十分な対応ができなかったことがミスにつながったと考えられる。

ボールは総合最終種目であり、最後まで演技をまとめ切ることができなかったことは課題として残った。一方で、本大会を通じて世界選手権へ向けた改善点は明確となった。今後は 4 種目すべてを安定してまとめ切る力を高めるとともに、予期せぬ状況にも冷静に対応できる実戦力をさらに磨き、世界選手権で最高の演技を発揮できるよう強化を進めていきたい。

【団体】 団体総合 5 位：53.150

〈総合2日目：フープ・クラブ〉

得点：27.015（DB5.6／DA7.7／A7.4／E6.35）

今シーズンの本種目は、これまでの国際大会において落下なく演技をまとめ切ることができていなかったが、本日は最後まで落下なく演技をやり切ることができた。これまでチームとして積み重ねてきた取り組みが形となり、安定した演技につながったことは大きな成果であった。

一方で、1つ目の交換、前方シリーズ、前転シリーズでは受けの追加価値を取り切ることができず、得点を伸ばし切れなかった。それ以外の場面では積極的に難度へ挑戦し、難度や追加価値を確実に実施することができたことから、D・Aスコアともに実施内容に見合った評価を得ることができた。

課題として挙げられるのは、依然としてEスコアである。落下のない演技であっても実施減点は大きく、身体難度の精度や四肢の美しさ、投げ受け時の移動など、細部に求められる質が減点につながった。技術を安定させるため、身体を固定して演技を行うことを意識してきたが、その影響で身体の動きに硬さが見られる場面もあり、技術の安定性と身体のしなやかさを両立させるためには、さらなるフィジカル強化が必要であることを再認識した。

しかし、春先のワールドカップシリーズ、そして先月の北京大会を経て、チーム全体のまとまりや試合運びは着実に向上しており、世界のトップチームとの差は少しずつ縮まっていることを実感できる内容となった。

【出場選手】

田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、田邊観世埜